

イエス・キリストの啓示 - 第3

預言的基盤の解明：啓示と真理への道の研究

Jeff Pippenger

2023-08-21

こうして原野を探し、真理という貴重な宝石を求めて掘り進めるうちに、隠された宝が見いだされる。思いがけず、集めて大切にすべき貴重な鉱石も見つかる。そして探求は続けられていく。これまで見つかった宝の多くは地表近くに横たわっており、容易に手に入った。探求が適切に行われるとき、純粋な理解と心を保つためにあらゆる努力が払われる。心を開いたまま、絶えず啓示の原野を探り続けるなら、私たちは真理の豊かな鉱床を見いだすだろう。

古い真理は新しい側面において明らかにされ、探求の過程で見落とされてきた真理も現れるだろう。偉大な真理は誤りの詭弁の下に埋もれてきたが、勤勉な探求者によって見いだされるだろう。探求者が真理という貴重な宝玉の宝庫を見つけて開くとき、それは盗みではない。これらの宝玉の価値を理解する者は誰もがそれを手にすることができ、やがて彼らもまた他者に開くべき宝庫を持つことになる。分かち与える者は自らの宝を失わない。というのも、他者を惹きつけるようにそれを示そうとして吟味するうちに、新たな宝を見いだすからである。……

真理の教師として人々の前に立つ者は、大いなる主題に取り組むべきである。彼らは取るに足らないことを語って貴重な時間を費やしてはならない。御言葉を学び、御言葉を宣べ伝えよ。彼らの手にある御言葉は、鋭い両刃の剣のようであれ。御言葉が過去の真理を証し、将来起こるべきことを示すように。

「増し加わる光が預言の偉大な真理のすべてを照らし、それらは新鮮さとまばゆい輝きのうちに見えるようになる。なぜなら、義の太陽の明るい光線が全体を照らすからである。」『原稿集』第1巻、37-40頁。

私は、以前の記事によって十分な預言的な象徴を提示し、これから黙示録を読み進めていくにあたっての良い参照点を設けられたと考えています。これらの記事をオンラインで読んでおられる方には、記事が日付順に並んでいることをご理解いただければと思います。私が分かち合っている内容の大半にすでに精通している読者がいることは承知しており、繰り返しの多さについてはお詫びします。私たちが扱っている真理について十分な聖書的裏づけを示すよう努めてきました。それは、Future for America が用いている原則に不慣れな方でも理解し、関心を保っていただけるようにするためです。彼らは、多くの私たちがすでに知っているこれらの概念に対する親しみを欠いているかもしれませんが、

最近まで気づいていなかったが、黙示録の中で開かれた非常に力強い真理がいくつかある。私はそれらを共有する前に、預言的な裏付けとなる根拠を先に築こうとせず、単に公の場に提示することもできたが、それらの真理はあまりに新しく、また重大であるため、真理を据えるべき何らかの土台なしに共有する気にはなれなかった。私は、これらの真理は、猶予期間が閉じられる直前に起こる黙示録の封印が解かれることとして示されているものだと信じている。

そして彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封印してはならない。時が近いからである。不義を行う者はなお不義を行わせ、汚れた者はなお汚れたままでおらせ、義なる者はなお義を行わせ、聖なる者はなお聖くあらせよ。」ヨハネの黙示録 22:10、11

イエスは真理を教えることについての原則を示されましたが、私はそれがここに当てはまると信じています。その原則は、聖霊の働きを識別するという文脈の中に位置づけられています。

そして彼が来るとき、彼は罪と義とさばきについて、世の誤りを明らかにする。罪については、彼らがわたしを信じないからであり、義については、わたしが父のもとに行き、あなたがたはもはやわたしを見ることのないからであり、さばきについては、この世の君がさばかれたからである。わたしにはまだあなたがたに言うべきことが多くあるが、今はあなたがたはそれに耐えられない。しかし、真理の御霊が来るとき、彼はあなたがたをすべての真理へと導く。彼は自分から語るのではなく、聞くところのことを語り、また、やがて起こることをあなたがたに告げ知らせる。彼はわたしに栄光を帰する。彼はわたしのものを受けて、それをあなたがたに示すからである。ヨハネによる福音書 16:8-16

キリストが「なおあなたがたに言うべきことは多いが、今はそれに耐えられない」と言われたことは、今まさに多くを分かち合うべきときであっても、まずはそれらの真理を築くための論理的前提が必要だという私の確信を裏づけている。とはいえ、直前の聖句は、聖霊が「罪と義と裁き」について世を責めることによって表されているものとして、三天使のメッセージを示している。これら三つのメッセージは最後の警告のメッセージであるため、聖霊の働きを明らかにしているこの箇所は重要な証しである。というのも、ここではメッセージが段階的に理解されること、そして聖霊の油を持つ者にしか理解されないことが強調されているからである。ヨハネは、黙示録において、世の終わりに安息日を礼拝するセブンスデー・アドベンチストであると自らを示すことで、まさにその真理を表している。

私は主の日に御霊にあつて、背後にラッパのような大きな声を聞いた。黙示録 1:10。

世の終わりに黙示録の封印が解かれたメッセージを理解できるセブンスデー・アドベンチストは、「御霊のうちに」あるからである。『アドベンチストの民の経験を描いている』と教えられてきたたとえ話の文脈では、ヨハネは御霊の油を持っているゆえに賢い乙女である。彼は、「背後に」大いなる声を聞く、世の終わりの賢い乙女たちを代表している。彼の「背後からの声」は、すぐ次の節でアルファでありオメガである方と特定されており、その声は彼に古い道に立ち返り、その中を歩むよう告げている。

主はこう言われる。「分かれ道に立って見よ。いにしへの道を尋ね、どれが良い道かを尋ね、それを歩め。そうすれば、あなたがたは魂の安らぎを見いだす。」しかし彼らは、「そこを歩まない」と言った。エレミヤ書 6:16。

エレミヤの言う「休み」とは、後の雨における聖霊の注ぎ出しのことである。次の節で、エレミヤは、アドベンチズムの基礎（古い道）に立ち返ってその道を歩むことを拒む愚かなおとめたちの第二の例を示している。

また、わたしはあなたがたの上に見張り人を立てて、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言った。しかし彼らは、「わたしたちは聞かない」と言った。エレミヤ書 6:17

ヨハネが、彼の背後で彼を古い道、すなわちアドベント主義の基礎へと導く声を聞くと、その声はラッパのようである。その声は、神がアドベント主義の上に立てた「見張り人」を通して伝えられる。ミラー父は、審判の開始を告げる第一の天使の宣言の時、アドベント主義の初めに警告のラッパを吹いた見張り人であった。だが、ヨハネが特に表すのは、審判の終結を告げる第三の天使のメッセージを宣べ伝える者たちである。彼は、神がミラーの働きを通して築かれた基礎に立ち返る者たちを表している。

私たちは長年にわたって繰り返し示してきました（そしてそれはハバククの表にも見いだすことができます）が、第一の天使のメッセージ「神を恐れよ」は罪を悟らせるためのものであり、第二の天使のメッセージにおいて義が現され、第三は裁きを指し示します。これらは三天使の三つの段階であり、同時に聖霊の働きの三つの段階でもあります。この三段階は、「真理」と訳されるヘブライ語の語を構成する三つのヘブライ文字によっても表されています。ヨハネによる福音書16章の箇所、イエスは、聖霊が神の民を「すべての真理」へ導き、同時に「将来のこと」を示す働きについて語っておられます。しかもイエスは、「あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、今はそれに耐えられない」とも言われます。

「真理」と訳されるヘブライ語の意義の一端を理解していただけたらと願っています。というのも、私たちはちょうどその象徴を私たちの学びに適用し始めたばかりだからです。黙示録1章の最初の三節において、神と人との間の伝達の過程が明らかにされています。それは、黙示録が神格の三重性を明らかにする以前に、すでに示されています。また、それは黙示録の最後の節々に第二の証言を見いだし、その際、「行に行を」を適用することに基づいて、さらなる光をもたらします。

それから創世記1:1-2:3を加えると、第三の証拠と、黙示録の冒頭と結末にある前の二つの筋の上に重ねるためのもう一つの預言の筋を見いだします。

さらに、来るべきエリヤを指し示す旧約聖書の最後の約束を加えると、預言の筋が四つになります。

そして新約聖書の第一章を加えると、すべての線にアルファとオメガの原則を適用することで、聖書に見いだされる究極のメッセージを組み立てるための五つの線がそろいます。すでに特定したその五つの線を、その原則を一律に適用して仕上げるなら、私たちが検討している「初めと終わり」の五つの預言の線が示しているのと同じ情報を、マタイの終わりとヨハネの終わりが証言しているのを見られるはずで

今、封印が解かれつつあるメッセージは『黙示録』において確立されており、それゆえ他の諸筋道に対する参照点となる。これは、ホワイト姉妹が「聖書のすべての書は黙示録において出会い、そして終わる」と私たちに教えていることと一致している。『黙示録』冒頭の三節のメッセージは、神がその御言葉をヨハネに伝え、彼に書き記させて諸教会に送らせるために用いられた過程を示している。新約聖書の第一の書は、すでに述べたように、イエス・キリストの系譜を掲げており、しかも非常に示唆に富む一点から始まっ

ている。

ダビデの子、アブラハムの子であるイエス・キリストの系図の書、マタイ 1:1

イエスは、理屈をこねるユダヤ人たちとの直接のやり取りを、「ダビデの子」という主題で彼らを沈黙させて締めくくった。これは、もし彼らが聖書における始まりと終わりの原則を理解していたなら、初めて理解できたはずの主題である。彼らはそれを理解しておらず、今も多くのアドベンチストは理解していない。歴史は繰り返すという原則に異議を唱えたい者は、古代イスラエルが現代イスラエルの予型であることを理解していないと自ら示しており、その原則を信じようとしない態度は、古代イスラエルの終わりに同じ原則を理解しようとしなかったのと全く同じである。イエスは、ユダヤ人たちへの最後のなぞかけにおいてその原則を示し、ダビデの主がいかにしてダビデの子でもありうるのかというなぞへと彼らを向けさせた。

ヨハネによる福音書1章は、初めにことばが神とともにあり、ことばは神であり、ことばによって万物が創造されたと述べています。これはもちろん、私たちが言及している他の箇所とも一致しています。そしてさらに、ヨハネによる福音書の最後の言葉を考えると、ペテロは、イエスから自分がどのように死ぬかを聞いた後、使徒ヨハネに何が起こるのかをイエスに尋ねています。

彼を見たペテロはイエスに言った、「主よ、この人はどうなるのでしょうか。」イエスは彼に言われた、「わたしが来るまで彼がとどまることをわたしが望むとしても、それがあなたに何の関わりがあるのか。あなたはわたしに従いなさい。」そこで、兄弟たちの間に「あの弟子は死なない」ということばが広まった。しかし、イエスは彼に「彼は死なない」と言われたのではなく、「もしわたしが来るまで彼がとどまることをわたしが望むとしても、それがあなたに何の関わりがあるのか」と言われたのである。これらのことについて証しをし、これらのことを書き記したのはこの弟子である。そして、わたしたちは彼の証しが真実であることを知っている。イエスがなさったことは、ほかにも多くある。もしそれらを一一つ書き記すなら、書かれるべき書物をこの世界そのものでも収めきれないであろう、とわたしは思う。アーメン。ヨハネ 21:21-25。

ペテロは、ヨハネがどのように死ぬのか、あるいはヨハネが死ぬのかどうかさえ知りたがっていた。その答えは、イエスがそれを述べ、次いでヨハネが言い直したこの箇所で、二度繰り返されている。「もし、わたしが、彼 [ヨハネ] がわたしの来るまでとどまることを望むとしても、それがあなたに何の関係があるのか。」ヨハネは実際にイエスの再臨まで生き延びた。

歴史の反復を信じ、さらに反復されるべき歴史が世の終わりにおいて起こるのだと信じる場合にのみ、その「真理」を見たり聞いたりできる。世の終わりとは、ヨハネが『黙示録』を書いたときに彼がいた場所である。ヨハネの福音の中の最後の書は、始まりと終わりに関する他の筋と一致しており、ヨハネを再臨へと至る出来事の歴史の中に位置づけている。そこでは彼が、最終的な警告のメッセージを告げ知らせる者たちを代表して、そのメッセージを諸教会に送る。

初代のキリスト者たちの時代に、キリストは再び来られた。彼の初臨はベツレヘムで、幼子として来られたときであった。彼の再臨はパトモス島で、黙示を受けたヨハネに栄光のうちにご自身を現されたときであった。ヨハネは彼を見たとき、「その足もとに倒れて死人のようになった」。しかしキリストは彼を強めてその光景に耐えさせ、そしてアジアの諸教会へ書き記すべき言葉を彼にお与えになった。アジアの諸教会の名は、それぞれの教会の特徴を言い表している。

「キリストがご自分のしもべである預言者に示された光は、私たちのためのものである。その啓示には、三天使のメッセージと、大いなる力をもって天から下り、その栄光によって地を照らす天使の描写が与えられている。その中には、終わりの日に存在するであろう邪悪に対する警告と、獣の刻印に対する警告が含まれている。私たちはこのメッセージを読み理解するだけでなく、少しの曖昧さもなく、世界に向けてはっきりと宣べ伝えなければならない。ヨハネに啓示されたこれらの事柄を提示することによって、私たちは人々を奮い立たせることができるだろう。」 Manuscript Releases, 第19巻, 41.

ヨハネによる福音書の結びは、再臨の歴史の中にヨハネを預言的に位置づけることによって、黙示録の冒頭三節に見られる啓示の伝達過程を明らかにしている。したがって、イエスの最初の「再臨」（パトモス）を、最後の「再臨」を例証するために用いている。それは私たちが検討している他の論点とも完全に合致している。というのも、それは、世の終わりにおけるヨハネ、すなわちイエス・キリストの黙示を受けるパトモスにいるヨハネを表しているからである。では、マタイによる福音書の結びはどうか。

それから、十一人の弟子たちはガリラヤへ行き、イエスが彼らに指示しておかれた山に登った。彼らはイエスを見て礼拝したが、疑う者もいた。イエスは彼らに近づいて言われた。「天においても地においても一切の権威がわたしに与えられている。だから、あなたがたは行って、すべての国々の人々を教え導き、父と子と聖霊の名によって彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように彼らを教えなさい。見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」アーメン。マタイによる福音書 28:16-20.

この箇所では、あらゆる権威がイエスに与えられており、当然それには彼の創造の力も含まれる。そして彼は、父と子と、創世記1章で水の上を動いておられた聖霊、さらに神の御座の前にある七つの御霊の名によってバプテスマを授けるよう命じている。この箇所は、クリスチャンが天の三者の三つの位格を、三つの明確に区別された存在として認めるべきであることを示している。マタイの結びは、他の六つがそうであるのと同様に、記述を付け加えている。

キリストは、バプテスマを御自身の霊的な御国への入り口を示すしるしとされた。父と子と聖霊の権威のもとにある者として認められることを望むすべての人が従うべき条件として、これを定められた。人が教会に住まいを見いだす以前に、すなわち神の霊的な御国の敷居をまたぐ前に、人は神の御名の刻印、『主は我らの義』を受けるべきである。エレミヤ書 23:6.

洗礼は、この世を捨てるという、きわめて厳粛な宣言である。父と子と聖霊の御名によって洗礼を受ける者は、そのキリスト者としての生涯の入り口において、サタンに

仕えることを捨て去り、王家の一員、天の王の子らとなったことを公に宣言する。彼らは、「彼らの中から出て、彼らと分かれよ、…汚れたものに触れてはならない」という命令に従った。そして彼らには、「わたしはあなたがたを受け入れ、あなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子と娘となる、と全能の主は言われる」という約束が成就する。コリント人への第二の手紙 6章17、18節。

キリスト者が厳粛な洗礼の儀に身をゆだねるとき、主は、主に忠実であることを彼らが誓うその誓約を記録される。この誓約は、彼らにとって忠誠の誓いである。彼らは父と子と聖霊の御名によって洗礼を受ける。こうして彼らは、天の三つの大いなる御力と結び合わされる。彼らは世を捨て、神の御国の律法を守ることを自らに誓う。今後、彼らは新しいいのちに歩むのである。もはや人のならわしに従ってはならない。もはや不正なやり方に従ってはならない。彼らは天の御国の律例に従うべきである。彼らは神の栄光を求めるのである。もし彼らとその誓約に忠実であるなら、あらゆる義を全うすることを可能にする恵みと力が与えられる。「彼を受け入れた者はみな、すなわちその御名を信じる者たちには、神の子どもとなる力が与えられた。」『伝道』、307頁

イエスは、ご自身の御言葉のうちに、初めをもって終わりを示しておられる。なぜなら、イエスこそ御言葉であり、アルファでありオメガであるからだ。

これら七つの「ライン」をまとめることで、神と人とのコミュニケーションの過程について非常に詳細な像が形作られる。さらに、他の「ライン」を証人として提示され、確認される多くの重大で重要な真理も伴う。アルファとオメガを表す七つの「ライン」の預言。しかし、マラキ書はどうだろうか。

マラキの書は、アドベンティズムにおける不忠実な祭司たちに対する痛烈な非難である。それは、世の終わりにおけるアドベンティズムの礼拝者を二つの類に分けて明らかにすることから始まる。

マラキによってイスラエルに臨んだ主の言葉の託宣。主は言われる、「わたしはあなたがたを愛してきた」。しかし、あなたがたは言う、「どのようにしてあなたは私たちを愛されたのか」。主は言われる、「エサウはヤコブの兄ではなかったか。しかし、わたしはヤコブを愛した」。マラキ 1:1、2。

マラキ書はさらに、終末における礼拝者の二つの類は、二種類の祭司であると教えている。

今や、祭司たちよ、この戒めはあなたがたのためである。もしあなたがたが聞き従わず、わたしの名に栄光を帰すことを心に留めないなら、わたしはあなたがたの上に呪いを送り、あなたがたの祝福を呪う、と万軍の主は言われる。まことに、あなたがたがそれを心に留めないゆえに、わたしはすでにそれらを呪った。マラキ書 2:1、2。

マラキ書の冒頭は、二つの祭司階級を通して、ラオディキアとフィラデルフィアのメッセージを象徴している。祭司たちは「聞け」と命じられている。ヨハネは「聞く」祭司たちを代表しており、また祭司は神の契約の選びの民を表している。彼らはすでに呪われており、「聞かず」、さらに「心に留めない」または「心に留めようとしない」なら、再び呪われるだろう。

あなたがたも、生ける石として、霊的な家に築き上げられ、聖なる祭司職とされ、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊的ないけにえをささげるためである。ゆえに、聖書にもこう記されている。「見よ、わたしはシオンに選ばれ尊い隅のかしら石を据える。彼に信頼する者は、決して辱められることがない。」それゆえ、信じるあなたがたにはこの方は尊い。しかし従わない者たちにとっては、「家を建てる者たちが捨てた石が、隅のかしら石となった」のであり、また「つまずきの石、妨げの岩」となった。彼らは、みことばに従わないのでつまずくのであって、そうなるように定められていたのである。しかしあなたがたは、選ばれた種族、王なる祭司、聖なる国民、神のものとされた民である。それは、あなたがたを暗やみからその驚くべき光の中へと召し出してくださった方の栄誉を宣べ伝えるためである。あなたがたは、かつては民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けたことのなかった者であったが、今は憐れみを受けている。ペテロの手紙一 2:5-10

祭司たちは、神殿の基礎にある「隅のかしら石」によって試される、神に選ばれた民である。隅のかしら石は、ほかのすべての礎石がそれに合わせて据えられる基準であり、また神殿全体の重みを支える石でもある。ミラーの隅のかしら石は、レビ記二十六章の「七つの時」であった。隅のかしら石、すなわち建てる者たちが退けた石についての物語は、神殿建設の真実の物語であり、それは「預言の霊」の著作に非常に具体的に記されている。最初に退けられたその石についての一点は、それが退けられた後に脇に置かれ、その時以降、神殿の建築者たちは作業場の中に脇に置かれていたその隅のかしら石につまずくようになったということである。それはつまずきの石であった。

マラキ書において、神は邪悪な祭司たち、すなわち愚かなラオデキアの乙女たちとも呼ばれる者たちに、これから彼らを「呪う」こと、そしてすでに「呪っている」ことを告げる。彼らがエリヤのメッセージを「聞き」、それを心に「留める」ことをしないからである。エリヤのメッセージは、父の心を子らに、子らの心を父に向ける。心を向け直すことは、父と子に関するエリヤのメッセージ、すなわち初めと終わりの原則を「聞く」ことを表している。初めと終わりのメッセージを「聞く」だけでは十分ではなく、それを心に「留め」なければならない。エリヤのメッセージを受け入れるとは、それを自分の心に「留める」ことである。その原則を「聞こうとしない」祭司は、呪われるだろう。

彼らは1863年に、ミラーが見いだした最初の根本的真理そのものを拒む過程を始めたとき、自らに呪いを招いた。そして今日に至るまで、その拒否を続けてきただけである。しかし、段階的な呪いは1863年に始まったとはいえ（彼らはすでに呪われているのだから）、将来形で語られる呪いは、日曜法のとくに彼らが主の口から吐き出されるときに起こる。マラキ書の冒頭は終わりを示している。というのも、その終わりは賢い祭司と愚かな祭司に与えられる最後の警告を表しているからである。マラキにおける賢い者と愚かな者は、エサウとヤコブとして表されている。兄は長子としての長子権を通して契約を表し、弟と対比される。兄が最初で、弟が最後である。

マラキ書では、エサウもヤコブもラオデキアのアドベンチストであるが、後者はやがて主の「声」を聞き、悔い改めて名をイスラエルに変えられた。年長の者、すなわち最初の者は聞かなかった。ヤコブは、キリストを表すはしごの上を御使いたちが上り下りするのを見た夢の夜に、主の声を聞いた。ヤコブは、世の終わりにおけるラオデキアのアドベン

チストを代表しており、ヨハネおよび御使いが上り下りするはしごのヤコブの夢によって示されるように、黙示録1章1～3節を経験するとき、ラオデキヤからフィラデルフィア人へと回心する者たちである。その経験は、ヤコブがフィラデルフィア人としてイスラエルへと回心していく始まりを示す。ヤコブの回心の物語の終わりは、ペヌエルで彼がキリストと格闘するときである。ゆえにヤコブの長子の権利の物語は、最終警告のメッセージの封印が解かれている黙示録1章の最初の三節において始まり、苦難の時、すなわち最後の七つの災いの時に終わる。

四つすべての始まりと終わりの組——「line upon line」——は、イエス・キリストの啓示のメッセージを証ししている。問題は、愚かな祭司たちが聞くのか聞かないのかだ。

この預言のことばを読む者と、これを聞き、その中に書かれていることを守る者たちは幸いである。時が近いからである。ヨハネの黙示録 1:3

御霊が諸教会に語ることを聞く賢明な祭司たちは、エリヤのメッセージを聞く。ミラーはエリヤであり、ある者は耳を傾けたが、他の者は拒んだ。

ウィリアム・ミラーが宣べ伝えた真理を受け入れるように、何千人もの人々が導かれ、エリヤの霊と力をもってそのメッセージを宣べ伝えるために、神のしもべたちが起こされた。イエスの先駆けであるヨハネのように、この厳粛なメッセージを説いた人々は、斧を木の根元に置き、人々に悔い改めにふさわしい実を結ぶよう呼びかけねばならないと感じた。彼らの証言は、教会を目覚めさせて強く感化し、その真の性格を明らかにするようなものであった。そして、やがて来る怒りから逃れよという厳粛な警告が響かされると、教会に連なっていた多くの者がその癒しのメッセージを受け入れ、自らの背信を悟り、悔い改めの苦い涙と魂の深い苦悩をもって、神の前にへりくだった。そして神の御霊が彼らの上にとどまると、彼らもまた「神を恐れ、その栄光を彼に帰せよ。彼の裁きの時が来たからである」という叫びをともに響かせた。『初期の著作』233頁。

ミラーは、エリヤとバプテスマのヨハネの双方によって予表されていた。なぜなら、バプテスマのヨハネがキリストの初臨のために道を備え、ミラーは1844年10月22日にキリストが天の聖所の至聖所に入られるための道を備えたからである。マラキ書は、ヨハネとミラーの働きを直接指し示している。

見よ、わたしは使者を遣わす。彼はわたしの前に道を備える。あなたがたが尋ね求める主が、突然ご自分の宮に来られる。あなたがたが喜ぶ契約の使者も一見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日をだれが耐え忍べようか。彼が現れるとき、だれが立っていられようか。彼は精錬する者の火、漂白する者の灰汁のようだからである。彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを清め、金や銀のように彼らを精錬する。それで彼らは義にかなったささげ物を主にささげるようになる。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々のように、いにしえの年々のように、主に喜ばれるものとなる。わたしはあなたがたのところに裁きのために近づく。わたしは、魔術を行う者、姦淫する者、偽って誓う者、雇い人の賃金で彼を搾取する者、やもめとみなしごを虐げる者、寄留者の権利を曲げる者、そしてわたしを恐れない者たちに対して、すみやかな証人となる、と万軍の主は言われる。わたしは主。わたしは変わらない。それゆえ、ヤコブの子らよ、あなたがたは滅び尽くされなかったのだ。マ

ラキ 3:1-6.

彼の時代の「見張り人」として、ミラーの働きは神殿の土台を築き上げることを表していた。彼の初期の働きは、神殿の完成を表す働きを示していなければならない。その最終的な働きには、ラッパに確かな音を響かせる別の見張り人が必要である。ミラーと第一の天使のメッセージは裁きの開始を告げ、アドベンティズムの終わりにおいてミラーが予表する見張り人は裁きの終結を告げるだろう。

マラキ書において、主は「魔術を行う者、姦淫する者、偽って誓う者、雇人の賃金を搾取し、やもめやみなしごを虐げる者、寄留者の権利を曲げる者、そしてわたしを恐れない者たち」に対して裁きを下すと約束しておられる。ここで指し示されているのは、「万軍の主」を「恐れない」者たちである。ウィリアム・ミラーは、人々に「神を恐れよ」と呼びかける第一の天使の使者である。土台を退けることは、神を恐れることを退けることである。

見よ、炉のように燃える日が来る。高ぶる者も、悪を行う者は皆、わらのようになる。来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない、と万軍の主は言われる。しかし、わが名を恐れるあなたがたには、義の太陽がその翼に癒しを携えて昇る。あなたがたは出て行き、牛舎の子牛のように跳ね回る。あなたがたは悪しき者を踏みにじる。わたしがこれを行う日に、彼らはあなたがたの足の裏の下で灰となる、と万軍の主は言われる。わたしのしもべモーセの律法、すなわち、わたしがホレブで全イスラエルのために彼に命じたおきてと定めを、覚えよ。見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は父の心を子に向け、子の心を父に向ける。さもなければ、わたしは来て地をのろいで打つ。マラキ書 4:1-6.

- ・ 聖書の始まり（創世記）と聖書の終わり（黙示録）。
- ・ 旧約聖書の始まり（創世記）と旧約聖書の終わり（マラキ書）。
- ・ 新約聖書の始まり（マタイ）と新約聖書の終わり（また黙示録）。
- ・ ヨハネの証しの始まり（ヨハネによる福音書）と、ヨハネの証しの終わり（再び黙示録）。
- ・ マラキの始まりとマラキの終わり。
- ・ マタイによる福音書の始まりとマタイによる福音書の終わり。
- ・ ヨハネによる福音書の冒頭と末尾。
- ・ 四福音書の冒頭と四福音書の結び。

複数回言及されている預言的な始まりや終わりを取り除くと、八つの預言的な行となり、それらはまとめて黙示録の最初の三節に重ね合わされるべきものです。創世記の終わりはどうでしょうか。

創世記第50章はヨセフの死で終わる。

こうしてヨセフは百十歳で死んだ。彼は防腐処置を施され、エジプトで棺に納められた。創世記50章26節。

第48章はヤコブの死を示している。第48章でまずヤコブの死が置かれ、第50章の結びの節でヨセフの死へと至ることで、創世記の最後の三章には「アルファとオメガ」の刻印が押され、創世記の結末であることが示されている。

その二つの死は、イスラエルのエジプトでの奴隷状態の始まりと終わりを象徴するものとして用いられている。初めに、ヤコブの遺骸は父祖たちと共に葬られるために持ち帰られ、そしてモーセがエジプトを出るときには、父祖たちの墓所に葬るためにヨセフの遺骨を携えて行った。

そしてモーセはヨセフの骨を携えて行った。ヨセフは、イスラエルの子らに「神は必ずあなたがたを顧みてくださる。そのとき、あなたがたは私の骨をここからあなたがたと共に携え上って行かなければならない」と固く誓わせていたからである。出エジプト記 13:19

創世記の結末は最後の三章に収められている。第48章では、ヤコブ（イスラエル）が十二人の息子たちを祝福し、その祝福は、調査審判の「終わりの日々」にその十二部族に何が起こるのかについての預言であると明言されている。

ヤコブは息子たちを呼び寄せて言った。「集まれ。終わりの日にあなたがたに起こることを告げよう。集まれ、ヤコブの子らよ、聞け。あなたがたの父イスラエルに耳を傾けよ。」創世記 49:1, 2.

調査審判の「終わりの日々」において、主はご自分の十二人の子らを集めると約束しておられる。彼らはヨハネの黙示録において十四万四千として表されている。これらこそ、ヨハネが黙示録で示している者たちである。彼らはヤコブからの呼びかけによって集められる。その呼びかけは彼らの初期の歴史に由来するもので、彼らに「聞け」「耳を傾けよ」と告げる。終わりの日々には、ヤコブの子らによって型示された者たちがメッセージを「聞き」、そして「耳を傾ける」（ヨハネの言葉では「そこに書かれている事柄を守る」）。それは父から子どもたちへの呼びかけであり、エリヤのメッセージである。呼び出された者たちは「ヤコブの子ら」と呼ばれ、また、彼らの父であるイスラエルに「耳を傾けよ」とも告げられている。

マラキ書におけるエサウとヤコブは、賢いおとめと愚かなおとめを表している。その呼びかけは、彼らの父ヤコブ、そして彼らの父イスラエルからのものであり、最後の呼びかけがなされるときには、すべての人がラオデキアのアドベンチストであり、欺く者ヤコブの子となるか、勝利者イスラエルの子となるかの選択が自分の手に委ねられていることを示している。彼らに選択を可能にするのは、そのメッセージに内在する創造の力である。そのメッセージを読み、聞き、守るなら、万物を存在させたのと同じ創造の力によって、彼らはイスラエルの子へと変えられる。聞くことを拒むのは、欺く者ヤコブの経験にとどまり続けることである。

ヤコブによる呼び集めは、黙示録で封印が解かれるメッセージの呼び集めでもあり、理解すべき重要な象徴である。レビ記26章の「七つの時」は、先に散らされることがなければ集めはないことを教えている。十四万四千人とは、その呼びかけに先立って散らされた者たちである。この真理は聖書の中で繰り返し示されている。

諸国の民よ、主の言葉を聞け。遠く離れた島々にそれを告げ知らせ、こう言え、「イスラエルを散らした方が、彼らを集め、羊飼いがその群れを守るように、彼らを守る」。エレミヤ書31章10節

十四万四千人と新たに結ばれる契約には、神が御自分の律法を私たちの心に書き記すという約束が含まれている。しかし、主からこの創造の御業を受ける者たちは、かつて散らされていた。

再び、主の言葉がわたしに臨んだ。「人の子よ。あなたの兄弟たち、すなわちあなたの同族、イスラエルの家の全体—エルサレムの住民が彼らに向かって『主から遠ざかれ。この地はわれわれに嗣業として与えられている』と言っているのは、まさに彼らのことである。ゆえに言え。神である主はこう言われる。たとい、わたしが彼らを異邦の民の間に遠く散らし、また彼らを諸国の中に散らしたとしても、彼らが行く国々で、わたしは彼らにとって小さな聖所となる。ゆえに言え。神である主はこう言われる。わたしはあなたがたを民の中から集め、あなたがたが散らされた国々から呼び集め、イスラエルの地をあなたがたに与える。彼らはそこに来て、その中にあるすべての忌むべきもの、すべての憎むべきものを、そこから取り除く。わたしは彼らに一つの心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を置く。わたしは彼らの肉から石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。」エゼキエル書 11:14-19

「散らし」との関係における十四万四千人の集結については、まだ語るべきことがあるが、まずは、私たちが検討しているこれら九つの箇所におけるアルファとオメガのしるしについての考察をまとめる必要がある。

創世記の最後の三章には二つの部類が描かれている。反逆者の部類と、知恵ある者の部類である。両者とも「これが道である、これに歩め」と告げる声を聞くが、一方の部類はラッパに耳を貸さず、古き道を歩むことを拒んだ。創世記四十八章から五十章における反逆者の部類は、第十三の部族によって象徴されている。

古代イスラエルの初めには十三の部族があり、現代イスラエルの初めには十三人の弟子がいた。他の十二人の弟子から区別されるただ一人の弟子と、他の部族から区別されたエフライムは、いずれも反逆の象徴である。ホワイト姉妹はユダを愚かな乙女と直接呼んでいる。

「昔も今も、そしてこれからもずっと、麦の中には毒麦があり、賢い乙女の間には愚かな乙女があり、灯火を持っていながら器に油のない者たちがいる。地上でキリストが築いた教会にも、貪欲なユダがいたし、その歴史のあらゆる段階においても、教会の中にはユダたちがいるだろう。」Signs of the Times, 1879年10月23日。

イスカリオテのユダは愚かなおとめであった。彼は毒麦であり、愚かなおとめであるなら、ラオデキヤ人でもあった。

「愚かな乙女たちに象徴される教会の状態は、またラオディキアの状態とも呼ばれている。」レビュー・アンド・ヘラルド、1890年8月19日。

創世記四十八章で、ヨセフの二人の息子はどちらもヤコブから祝福を受け、その時以降、彼らは「半部族」と呼ばれるようになった。半部族であろうとなかろうと、彼らは依然

として部族であった。イスカリオテのユダがかつて占めていた十二番目の地位を埋めるために、彼はマティアに取って代わられた。ユダは弟子であり、この意味では——初めに十三の部族があったのと同様に、古代イスラエルの終わりには弟子が十三人いたことになる。

ヨセフの子エフライム（第十三の部族）は、北の十部族がヤロブアムを支持して結集し、王国が北の十部族と南の二部族に分かれたとき、反逆の象徴となった。なぜ私は、ヨセフの子エフライムを兄のマナセではなく反逆の象徴とみなすのか。エフライムに関する反逆は、ヤコブが十二人の息子たちを祝福する前の第四十八章で始まる。第四十八章で、ヤコブはまずヨセフの二人の息子を祝福する。マナセは長子であったため、ヨセフは息子たちへの最初の祝福はマナセに与えられるべきだと考え、ヤコブがエフライムを選ぶことに反対した。

神の選民の代表としてのエフライムの始まりには反逆の証しがあり、エフライムの終わりは、紀元前723年から1798年に至るレビ記26章の「七たび」による散らしである。紀元前723年、北の十部族、すなわちエフライムの王国（イスラエルとも呼ばれる）は、聖書予言における王国として致命的な傷を受けた。その致命的な傷は時の予言を開始し、その予言は1798年に教皇権とその王国が致命的な傷を受けることで結末を迎えた。1798年における教皇権の致命的な傷は、ダニエル書11章45節において北の王が「助ける者なくしてその終わりに至る」とされるとき、バビロンの最終的な没落の型である。終わりの時代におけるバビロンの反逆と没落は、1798年の教皇権の反逆と没落によって型取られており、さらにそれは、紀元前723年のエフライム（イスラエル）王国の反逆と没落によって型取られており、そしてそれは、創世記の終わりに示されているとおり、ヨセフが父の預言的靈感に反逆したことによって型取られている。

エフライムが象徴する反逆は、彼の父（ヨセフ）がその父（ヤコブ）に対して起こした反逆に始まる。最終的には北イスラエルの十部族の反逆へとつながり、それがレビ記二十六章で「七たび」として表されている「散らし」へとつながる。北王国が散らされていた期間は二つの時期に区分され、一つは538年に終わり、次の時期は1798年に終わる。これらはすべて、ヨハネの黙示録において恩寵期間が閉じる直前に封印が解かれるメッセージを指し示している。そのメッセージはバビロンの最終的な倒壊を明らかにする。エフライムの預言的歴史の各道標には、反逆が刻印されている。ちょうど十三番目の弟子、イスカリオテのユダの反逆と同様に、これは、十三という数を反逆の象徴として示す証しの二つである。しかし、これらの聖なる真理は、ミラーが発見した最初の真理、そしてアドベンティズムが最初に捨て去った真理の上に築かれたアドベンティズムの土台の上に立っていないければ、認識することはできない。

創世記の結末は、これまで検討してきた他の論点すべてと一致している。総括すると：

はじめに、天の三者である父と子と聖霊は、み言葉でもある子によって成し遂げられた天と地の創造を見届けた。み言葉は、父から人類への伝達の経路となり、また、人類が父と意思疎通する唯一の道である。父のメッセージは子から天使ガブリエルに与えられた。ガブリエルは、天におけるルシファーの反逆ののち、ルシファー（光を担う者）に代わった者である。ガブリエルは光、すなわちメッセージを受け取り、それを預言者に届ける

. 預言者は、父から墮落した被造の家族へメッセージを渡す任にあてられた聖なる被造者である。預言者に与えられたメッセージは書き記され、その後人類に伝えられる。伝達の過程のあらゆる段階でそのメッセージは聖なるものであり、このため、墮落した人間である預言者たちは聖なる者であるべきである。聖なるメッセージが墮落した人類の手に渡る時点で、人類は聖別されていない手で聖なるメッセージを扱いうる可能性を帯びる。こうして、聖なるメッセージの光は、光と闇の双方を生み出す。墮落した人の家族に属する者がそのメッセージを受け取るとき、そこには万物を創造したのと同じ創造の力が宿っており、それはその者を義とする力である。伝達過程の始まりは、その終わりを示している。ゆえに、そのメッセージが聞かれ、読まれ、守られるなら、そのメッセージは墮落した人類を子のかたちに再創造する。

この預言のことばを読む者と、これを聞き、その中に書かれていることを守る者たちは幸いである。時が近いからである。ヨハネの黙示録 1:3

ヨハネは、調査審判の「終わりの時」に、背後からの声を聞き、過去へと導くメッセージを受け取るために振り向く墮落した人類の姿を示している。そのメッセージを受け取り、それを自分の人生の一部にするのではなく、人生そのものとする者たちは、その時その場で義とされる。義とされるとは、聖なる者とされることである。父から送られたメッセージを読み、聞く者たちが、そのメッセージを受け入れて聖とされるとき、それはそのメッセージの内にある創造の力による。その創造の力は、人がアブラハムのように信じるとき、人を義とする業を成し遂げる。そのメッセージは、彼らに振り向いて背後の声に耳を傾けるよう教え、その声は古き道、すなわち土台となる真理へと彼らを導く。そのメッセージは彼らをすべての真理へと導き、彼らが古き道を歩むとき、彼らは義とされた者の道を歩んでいる。

しかし、正しい者の道は輝く光のように、ますます輝きを増し、真昼に至る。悪しき者の道は闇のようだ。何につまづくのか、彼らにはわからない。わが子よ、わたしの言葉に心を留め、わたしの言うことに耳を傾けよ。これらをあなたの目から離さず、心のただ中に保て。それは見いだす者にいのちとなり、その全身を健やかにする。あらゆる用心をもってあなたの心を守れ。そこから命の源が流れ出るからだ。よこしまな口をあなたから取り除き、ねじけた唇を遠ざけよ。あなたの目をまっすぐ前に向け、まなざしを正面に定めよ。あなたの足の道筋をよく考え、あなたのすべての道を確認なものにせよ。右にも左にもそれるな。悪からあなたの足を離せ。箴言 4:18-27

伝えられたメッセージによって義とされた者たちは、ますます増し加わる光を表す道を歩む。しかし、まさにその光が、悪しき者の道をそれに応じていっそう暗くする。光は闇から分かれたる。初めに「光あれ」と命じた創造の力は、終わりにおいて、人類に対して、初めに光がもたらしたのと同じ効果を生み出す。背後の声を聞くことを拒み、そのために暗闇の道を歩むことを選ぶ者たちの部類は、彼の御言葉に「つまづく」というのも、彼らは礎石、古くから試されてきた石につまづくからである。その声はアルファでありオメガである。そして、義とされた者たちがその言葉を聞き、その言葉に心を傾げるとき、彼らはその言葉を心のただ中に留める。なぜなら、アルファでありオメガであるその声が彼らの心を父祖たち（過去）へ向け、父祖たちの心は終わりを指し示すからである。

正しい者の道はまっすぐです。まことに正しい方よ、あなたは正しい者の道をまっすぐにされます。主よ、あなたのさばきの道にあって、私たちはあなたを待ち望みました。私たちの魂の願いは、あなたの御名と、あなたを覚えることにあります。夜には、私の魂をもって私はあなたを慕い求めました。まことに、私の内にある霊をもって、私は朝早くあなたを尋ね求めます。あなたのさばきが地にあるとき、世に住む者は義を学ぶからです。イザヤ書 26:7-9

神は、義の道を歩む者たちを量り、すなわち裁かれる。そしてそれは、御裁きが地に行われている「終わりの日」になされる。義なる者とは、十人の乙女のたとえにおける「遅れの時」の成就のうちに主を待ち望んだ者たちである。知識が増し加わる道を歩む者たちの願いは、神の御名、すなわちその御性質をますます深く理解することである。彼らの主を待ち望んだ者たちは、最後の警告のメッセージを宣べ伝える人々である。というのも、彼らこそ「真夜中の叫び」を宣べ伝える人々であり、これはもちろん黙示録18章の第一の内的メッセージで、その後第二の外的メッセージが続くからである。

これらの後、私はもう一人の御使いが天から下ってくるのを見た。彼は大いなる権威を持ち、その栄光によって地は照らされた。彼は力強い大声で叫んだ。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪魔どもの住まいとなり、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた忌むべき鳥の檻となった。というのは、すべての国々が彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と淫行を行い、地の商人たちは彼女のぜいたくの豊かさによって富を得たからである。」そして私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出よ。彼女の罪にあずからず、その災いを受けないためである。」ヨハネの黙示録 18:1-4

2001年9月11日に黙示録18章の天使が降臨したとき、セブンスデー・アドベンチスト教会は、古き道に立ち返る最後の呼びかけを拒んだ。こうして同教会は、米国における真のプロテスタント主義の旗手であることをやめた。その時、力強い声のそのメッセージを受け取り、それを食べることを選んだ者たちに対して、試練の過程が始まった。これは、1840年8月11日、アドベンチズムの始まりにおいて黙示録10章の天使が降臨したとき、ヨハネに象徴されている通りである。第一の天使のメッセージが拒まれたときに真のプロテスタント主義の外套を受け継いだ霊的な国民は、その後、アドベンチズムの初期における背教的プロテスタント主義の足跡をたどった。

そのとき、真のプロテスタントの角は、黙示録10章で天使の手にあった小さな巻物のメッセージを受け入れた者たちに与えられた。1840年から1844年にかけてのアドベンチズム初期の試練の過程は、2001年9月11日から米国における日曜法に至るまでのアドベンチズム終期の試練の過程を表している。1840年から1844年の最初の歴史と、2001年9月11日に始まった試練の過程は、プロテスタント主義の衣を担っていた旧来の信者の共同体から、真のプロテスタント主義の衣を受け継ぐ新たな信者の共同体へと移る、時代区分上の転換を画している。

義とされた者の歩みを考察するうえでさらに重要なのは、その歴史の中に、遅延の時の始まりを画する失望があるということである。忠実な者たちはその時に主を待ち望み、その時は真夜中の叫びのメッセージの封印が解かれることで終わる。アドベンチズムの初めにおけるその試練の過程は、1844年10月22日に真夜中の叫びのメッセージが終結したと

きに終わった。終わりの時におけるその試練の過程は、ヨハネに代表される者たちにとって、アメリカ合衆国における日曜法の時に終結する。終わりの時における真夜中の叫びのメッセージは、初めと同様に終結する。そしてアドベンチズムの初めにおいては、真夜中の叫びのメッセージは、試練の過程の終わりに先立って封印が解かれた。初めの真夜中の叫びのメッセージが、今、終わりの時において封印が解かれつつある。

義とされた賢いおとめたちは、邪悪で愚かなおとめたちが死の契約を結ぶときに、神と契約を結ぶ。

彼は彼らに言われた、「これこそ、疲れた者を休ませる休みである。これこそ、憩いである」。しかし、彼らは聞こうとしなかった。しかし、主の言葉は、彼らには「戒めに戒め、戒めに戒め、規定に規定、規定に規定、ここで少し、そこで少し」となった。彼らが行って、うしろに倒れ、砕かれ、わなにかかり、捕らえられるためである。このゆえに、エルサレムにいるこの民を治めている、嘲る者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたがこう言ったからだ。「われらは死と契約を結び、陰府と協定を結んだ。押し寄せる鞭が通り過ぎるときも、それはわれらに及ばない。われらは偽りを避け所とし、虚偽のもとに身を隠したからだ」。それゆえ、主なる神はこう言われる。「見よ、わたしはシオンに、礎として一つの石を据える。試みを経た石、尊い隅の石、堅固な礎である。信じる者は慌てることがない」。イザヤ書 28:12-16

義とされた者たちは、真夜中の叫びの聖なるメッセージを教会に伝え、その後、バビロンから出るように人類を呼び出しながら、第二の声のメッセージを宣べ伝える。

それゆえ、世界への警告の最後の働きにおいて、諸教会に対して二つの明確な呼びかけがなされる。第二の天使のメッセージは、こうである。「バビロンは倒れた、倒れた。あの大いなる都は、彼女がその淫行による激しい怒りのぶどう酒をもって、すべての国々に飲ませたからである。」そして第三の天使のメッセージの大いなる叫びにおいて、天から次のような声が聞こえる。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからないため、またその災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされたからである。」レビュー・アンド・ヘラルド、1892年12月6日。

バビロンから出て来て義の道を歩む者たちに加わる者は、天の三者の御名によって表されるバプテスマの水を通して群れに受け入れられる。義とされる者は、いまパトモスでヨハネに与えられたメッセージを聞いている者であれ、その後にバビロンから呼び出される者であれ、皆、聖霊を受けることによって義とされる。その聖霊の神性と人間の人性との結合は、キリストがご自身で人性をお取りになったとき、模範として実現した。十四万四千人は、二人の証人、すなわちヤコブの十二の息子たちと十二人の弟子たちによって表されている。悪しき者は十三番目の部族と十三番目の弟子によって表される。いずれの例における「十三」も、神に仕える祭司となるよう召されたが、その召しを退ける者はエサウにより表され、弟であるヤコブはその召しを受け入れる者を表す。エサウとヤコブはともに、世の終わりにおけるラオデキヤのセブンスデー・アドベンチストを表している。一方の者たちは、預言者の著作を通して伝えられる聖なるメッセージを受け入れてイスラエルとされるが、エサウはその名を保ったままである。

もちろん、アルファとオメガのこれらの九行には、さらに多くのものが含まれている。というのも、これは神の御言葉における始まりと終わりを簡潔に総括したにすぎなかったからだ。

創造から再臨に至るまでの預言的な歴史を表す、九つの歴史の系統。これら九つの、始まりと終わりに関する預言の系統は、黙示録三章の最初の三節と直接結びついている。その三節は、恵みの時が閉じられる直前に封印が解かれるイエス・キリストの啓示が、神の創造の力の現れであることを示している。モーセの時代から黙示録記者ヨハネの時代に至るまで、さまざまな証人が残した証言を寄せ集め、これほど複雑に織り成された証しを作り上げることができるのは、いったい他にどのような力だろうか。

靴を脱ぎなさい。ここは聖なる地だから。